

論文の和文要旨	
論文題目	事象の「所有」に基づく lassen および自由与格による項の拡張—ドイツ語の移動動詞を例に—
氏名	高橋 美穂

本論文の目的は、項の拡張現象である lassen による統語的使役構文と自由与格の追加について、移動動詞を対象とし、構文の解釈可能性および項拡張に関わる仕組みを明らかにすることである。lassen による使役と自由与格については、これまでに多くの分析が行われているが、従来、lassen 使役では動作や行為を表す動詞を、自由与格ではある種の変化を内在する動詞を中心とし、用法の記述や分類がなされてきた。fallen (落ちる)、laufen (走る・歩く)、rollen (転がる)、schwimmen (泳ぐ) といった移動動詞は、両者の構文において用いられることができるものの、そのどちらにおいてもいわばその構文で現れうる周辺的な動詞として見なされてきたといえる。しかし、そのような移動動詞について、lassen による使役構文 (lassen 構文) および自由与格を伴う構文 (与格構文) で出現する場合を観察してみると、両構文がともに、新たに追加された項 (主語または与格) の「意図しない出来事」を表しうるという意味的な共通性を持つことが示唆される (例えば Ich ließ die Flasche auf den Boden fallen./Die Flasche fiel mir auf den Boden. 「瓶が床に落ちてしまい、私はそれを意図せずに引き起こした」)。本論文では、この共通性を手がかりとし、lassen 構文と与格構文を並行的に捉えながら、それぞれの構文で新たな項が追加されるにあたり、どのような語彙的な操作が認められるのかを明らかにした。

本論文は、全 8 章からなる。以下、各章の概要を示す。

第 1 章では、本論文で取り上げる項の拡張現象—lassen による統語的な使役の構文と自由与格の追加—について、その概略を示した。さらに、具体的な調査・分析の対象として移動動詞を扱うことを述べ、本論文の研究目的を示した。

第 2 章では、lassen による使役と自由与格について、先行研究における意味用法や項拡張の認可に関わる意味的背景を述べたうえで、両構文が特定の環境下で表しうる共通した意味解釈を、具体例をもとに示した。まず、lassen 使役については、辞書や文法書の記述、および Nedjalkov (1976)、Ide (1996)による意味分類を概観した。さらに、これらの先行研究において中心的には取り上げられなかったものの、lassen による使役の構文では、質的に異なる使役のあり方—「間接使役」と「直接使役」—が認められることを確認した。続いて自由与格については、主に Wegener (1985)や Ogawa (2003)などの先行研究を概観したうえで、人と表される事態との影響関係を中心とし、所有関係から利害関係に至るまで連続的な広がりを持つ意味が表されることを述べた。以上の議論を受けて、「表される事態の生起に（間接的あるいは直接的に）関与する」という意味を表す lassen 使役と、「表される事態から何らかの影響を受ける」ことを基底とする自由与格が、一部の状態変化動詞や、fallen（落ちる）や rollen（転がる）などの特定のタイプの移動動詞が現れる環境において、新たに追加された項の「意図しない出来事」を表すという意味的な接点を持つことを指摘したうえで、本章の最後において、本論文が明らかにしようとする具体的な問題を提起した。

第 3 章では、fallen（落ちる）、laufen（走る・歩く）、rollen（転がる）などの移動動詞が、lassen 構文および与格構文で出現する場合に観察される、両構文の具体的な解釈を明らかにし、項拡張の基底となる移動動詞の分類を、先行研究に基づき示した。移動動詞が lassen 構文で現れる場合には、「間接使役」と並び、「直接使役」の下位分類である「意図的使役」「非意図的使役」という 3 つの解釈が認められる。移動動詞が与格構文で出現する場合、受益や被害といった「被影響」の解釈のほかに、表される事態の生起の責任が与格の人物に帰せられるという、いわば「潜在的使役」と呼べるような解釈が可能となる。動詞の項構造の拡張に基づいて得られるこれらの構文の解釈は、その基底となる動詞本来の語彙的意味の影響を受けるものと思われるが、ドイツ語の移動動詞は、従来 of 記述的研究において、内的要因による能動的な移動を表すか、あるいは外的要因による受動的な移動を表すかで大別されてきた（Gerling/Orthen

(1979)、Schröder (1993)など)。以上のように、移動動詞が出現する lassen 構文および与格構文の具体的な解釈、先行研究における移動動詞の分類を示したうえで、ドイツ語移動動詞の分析において経験的に区別されてきた、能動的・自律的移動あるいは受動的・非自律的移動という区別と、lassen 構文および与格構文の解釈可能性との間に、一定の相関関係が認められることを、いくつかの移動動詞の例をもとに示した。

第4章では、lassen 構文と与格構文の接点を担う、lassen 構文における「非意図的使役」の解釈および与格構文における「潜在的使役」の解釈が、どのような統語的・意味的条件下で可能であるのかを明らかにするために、IDS (= Institut für Deutsche Sprache「ドイツ語研究所」)によって公開されている、大規模オンライン・コーパスから収集した実例に基づき、調査・分析を行い、その結果を示した。調査対象の動詞は、fahren (車などで行く)、fallen (落ちる)、fliegen (飛ぶ)、klettern (よじ登る)、kriechen (這う)、laufen (走る・歩く)、reiten (騎行する)、rollen (転がる)、rudern (ボートを漕いで行く)、rutschen (滑る)、schwimmen (泳ぐ)、segeln (帆走する)、springen (跳ぶ)の13の移動動詞とし、コーパスから収集された両構文の事例数は、全511例(lassen 構文311例、与格構文240例)である。事例分析の結果、lassen 構文の「間接使役」の解釈は、補部で内的要因による自律的移動が表される場合に、「意図的使役」「非意図的使役」の解釈は、補部で外的要因・原因が想定される非自律的移動が表される場合に、それぞれ可能であることが確かめられた。また、与格構文の「被影響」解釈が表される移動のタイプによらずに認められる一方で、「潜在的使役」解釈が非自律的移動タイプに限定されることも、実例に基づき確認された。さらに、両構文において共起が観察された文要素、とりわけ、移動の起点・着点・中間経路を表す経路項に着目し、分析を行ったところ、lassen 構文および与格構文の解釈と、経路項の表示の有無およびその内実とが、密接に関連していることが明らかとなった。

第5章では、移動動詞を対象とした与格構文および lassen 構文の定式化に先立ち、本論文の分析の理論的な背景となる、語の意味と文意味との対応関係を探る語彙分解のアプローチについて、Jackendoff (1990)、Pustejovsky (1991)、Levin/Rappaport Hovav (1995)、および Wunderlich (1997a)による主要な先行研究を取り上げ、その概略を示した。次いで、語彙分解の手法で用いられる基本的な意味関数を確認した。

第6章では、lassen による使役と自由与格による項拡張の基底となるドイツ語の移動動詞の意味構造が、どのように定式化されるかを示した。まず、語彙分解の手法に

基づく Kaufmann (1995a)、Rapp (1997)、Oya (2005)による移動動詞の意味構造を取り上げたうえで、これらの先行研究では、語場やヴァレンツ理論の流れを汲む移動動詞の分析で経験的に区別されてきた、内的要因による移動（自律的移動）か外的要因による移動（非自律的移動）かという違いが顧みられていないという問題点を指摘した。さらに、移動事象に関わる意味関数の定義を示し、移動動詞によって表される移動タイプの違い、すなわち、自律的移動と非自律的移動とに対応する、本論文独自の意味構造を提案した。

第7章では、動詞本来の語彙的意味に基づく項構造を拡張する働きを持つ、自由与格の追加と、lassen による使役が、どのような操作として分析されるのか、その意味構造の定式化を試みた。与格構文の定式化にあたっては、個体間に認められる狭義の所有関係（＝「人にモノがある」）に基づき、ドイツ語の自由与格を捉えた Wunderlich (2000)による「所有者拡張」分析を批判的に捉え直し、人と事象間に認められる広義の所有関係を表す意味関数 HAVE (z, s)（＝「zによる事象sの所有」／「人にコトがある」）を導入することで、移動動詞が出現する与格構文で表される「被影響」および「潜在的使役」の解釈が、それぞれ一定の条件下で導き出されることを示した。さらに、lassen 構文については、補部で表される移動のタイプ（自律的移動／非自律的移動）に応じて、異なる操作で定式化されることを論じた。

第8章では、本研究の分析結果を総括したうえで、分析の結果から示唆される展望を述べた。

本論文の調査・分析の結果から、ドイツ語の移動動詞では、表されうる移動のタイプ—自律的移動あるいは非自律的移動—の差異に応じて、lassen 構文および与格構文という項の拡張現象において、異なる語彙的な操作が認められる（lassen 構文）、あるいは意味論的に可能な解釈が決定される（与格構文）ことが明らかとなった。移動動詞によって表される移動のタイプを分ける基準は、その移動に CAUSE（使役）の意味関係による外的原因が想定されるか否かであると考えられる。「使役」の関数 CAUSE が lassen による使役と自由与格という、広義の態の交替関係において重要な役割を演じているという本研究の分析の成果は、基本関数としての CAUSE の重要性を確認するものであるとともに、語の意味と文意味との対応関係を探るうえでの新たな視座を提供するものであるといえる。